

『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「スタイルの生成と選択」（エディター：森山、李、木林）の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。

なお、特集では最終投稿期限が設定されていますのでご注意ください。投稿論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入ります。したがって、より早く投稿された論文ほど、査読が早く済み、論文を修正する機会が多くなります。最終投稿期限は特集論文の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので、早く投稿できる方は早めに投稿されることをお勧めします。刊行時期までに採用とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

特集論文の最終投稿期限：2014年11月28日（金）

掲載号の発行：2015年9月（第18巻第1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：新電子投稿システムを利用して投稿のこと（本学会 HP の「学会誌」ページ参照）

タイトル：スタイルの生成と選択

担当エディター：森山由紀子（同志社女子大学）

李吉鎔（中央大学校）

木林理恵（日本学生支援機構）

本特集では、スタイルを「コンテクストに応じて一話者内で観察されるバリエーション（高野 2012）」と定義し、スタイルに関する幅広い視野の論考を求めることによって、現状を把握し、体系的な研究への一助となるような知見を蓄積することを目指す。

「ことばの使い方」は、いつの時代も人々の関心事である。なかでも、複数ある選択肢の中でどのことばをどのように使うかというスタイルの使い分けの問題に、私たちは常に直面している。研究史においては、様々な角度からことばのバリエーションにかかわる問題が解明されてきた。例えば、特定の地域方言・社会方言に焦点を当て、それぞれのスタイルの体系・分布・動態といった、いわば言語的側面を解明することに重点が置かれた研究や、談話分析におけるスピーチレベル・シフト研究のように、社会的規範と個人のストラテジーといった対人機能の観点から、一個人が多種のスタイルを使い分けることに注目した研究などがある。

近年の社会の流動化、複雑化により、個人が使い分けることばのスタイルはますます多様化しており、研究の観点は広がっている。地域方言と共通語、敬体と非敬体、書きことばと

話しことば、母語と外国語、様々な社会方言・属性を表すことば等があり、それらの中から、人々は何によってどのようにそのことばを選択するのか、それらの使い分けはどのような機能を有しているのか、ということの解明は基礎的な課題となる。また、上記に二元的に示した対立の間には、多くの中間的なスタイルも存在する。新たなメディアの発達やコミュニケーションのあり方の変化に伴い、新たなスタイルが生成されることもあるだろう。本学会では、2007年の第19回研究大会において、シンポジウム「社会言語学における『人の社会的属性』の扱いを問い直す」(日高水穂・金水敏・田中ゆかり・熊谷智子・松丸真大)が行われている(日高2007)。その討論では、「着脱される属性」という考え方や、新しいメディアとの関係、特定のスタイルが種々のイデオロギーと結びついていくダイナミズム、一般の言語イメージが所謂「役割語」になっていくプロセスの解明、といった問題意識が提示されている。こういったスタイルの「生成」とその影響の問題も興味深いテーマとなる。

さらに、日本語のスタイルを浮き彫りにするには、他言語のスタイルとの対照を試みる方法もある。社会が異なれば自ずとスタイルに関する規範も異なるであろう。関連する事象として、日本人とは異なった規範を持つ日本語学習者は日本語の様々なスタイルとその運用をどのように身につけるのか、または海外の移民社会の中の日本語は、現地語との接触の中で、どのようにスタイルを維持または生成しているのか、などという広がりを持つものである。このように、「スタイル」の諸問題は、社会・文化とのかかわりが極めて大きく、本学会の取り組むべきテーマの一つであると言えよう。

そこで本特集では、以上のような広い視野に立った上で、ことばのスタイルをテーマとする実証的な研究論文を募集する。スタイルについての研究は、大きく、①スタイルの言語的実態、②スタイルの社会的機能と使い分け、の二つに分けることができる(渋谷2008)。さらに、高野(2012)では、スタイル選択の解釈のための理論的背景が、①発話の意識(Attention to Speech Model)、②聴き手への反応(Audience Design Model)、③話し手のアイデンティティ(Speaker Design Model)と広がってきたことが述べられている。アプローチは問わないが、特定のスタイルの観察や記述を目的とするものよりも、それらの「選択」あるいは「生成」に焦点を当て、人間・社会・文化とのかかわりを強く意識した研究を求める。また、データに基づく実証的研究の範囲内で、スタイル研究に新たな理論的枠組みやモデルを提案する論考も大いに期待したい。

参考文献

- 日高水穂 (2007). 社会言語学における『人の社会的属性』の扱いを問い直す 社会言語科学 10(1) pp.63-67.
- 渋谷勝己 (2008). スタイルの使い分けとコミュニケーション 月刊言語 37(1) 大修館書店 pp.18-25.
- 高野照司 (2012). ことばのスタイルを理解し応用する 日比谷潤子編著 はじめて学ぶ社会言語学 ミネルヴァ書房 pp.248-269.